

最優秀賞

あの日の晴れの先に

水戸市立第四中学校

三年 佐藤 莉桜

晴れ、晴れ、また晴れ……。判で押したような天気予報をながめながら食パンを頬張る。最近、水戸市では雨が少ない。登校が楽になってうれしいな。そう心の中でつぶやいて、足取り軽く学校へ向かった。雨を切実に願う日が来るなんて、このときの私はまだ知る由もなかった。

ある朝、じゃ口をひねると流れ出す水にカビのような匂いが混じっていることに気がついた。「少し臭うくらい大したことではない」と自分に言い聞かせた。いつの間にか「無臭の水」が当たり前になっていたからこそ、その変化に違和感を覚えた。一月の降水量はほぼゼロ。気候の変化が、すでに日常の中に入り込んでいた。

その小さな変化をきっかけに、私は普段意識しない「水」について考えるようになった。川や自然とのつながりを確かめたくなり、近くの石川川へ向かった。母校の校歌にも「石川川も清らかに」と歌われており、この地域にとってなじみ深い川だ。しかし、目の前の川の水は濁り、人工的な泡が水面に浮かんでいた。日差しを受けて、何かがきらりと光った。それはよく見ると空き缶だった。見えないからといって、軽い気持ちで捨てられたのだろうか。私たちの何気ない行動が、どれほど多くの生き物たちの居場所を奪っているのかを思い知らされた。家に帰って母にそのことを伝えると

「小学生の頃、石川川によくホタルを見に行ったのよ。」

と母は静かに言った。かつては川岸に草が生い茂り、小さな命が息づいていたという。夜の闇に浮かぶホタルの光は、自然の豊かさそのものだったのだろう。その言葉が、今の川の姿と重なって胸に残った。

さらに祖父にも話を聞いた。六十年前の川は澄んでいて、オイカワなどの魚が泳ぎ、よく魚釣りを

していたという。水道がまだ十分に整っていないかった時代、井戸水をくむと、その冷たさや重みを通して水の存在をはっきりと感ずることができたそう。祖父にとって水は、日々欠かせないものにとどまらず、人と自然を結ぶ「生きた恵み」だった。

現代ではじゃ口をひねれば安全な水が出てくる。その便利さの中で、私たちは水の源を意識する機会を失いつつある。地下水や川といった自然循環の上に、今の生活が成り立っていることを忘れてしまいがちだ。こうして考えるうちに、水は当たり前に存在するものではなく、限られた自然の恵みなのだと感じた。

世界には今も水不足に苦しむ地域があり、日本でも異常気象による降水量の変化や水質の悪化が起きている。それは遠い話ではなく、すでに自分の生活の中に現れている。

では、自分にできることは何だろうか。まずは水を無駄にしないこと。コップを使って口をゆすぐ習慣も、その一つだ。次に、水を汚さない意識を持つこと。洗剤の量を減らすなど、小さな工夫でも意

味はある。そして、身近な川や自然に関心を持ち続けること。理解が深まれば、行動が変わるはずだ。

水は単なる資源ではなく、人と自然をつなぐ存在だ。かつて当たり前に使っていた水の向こう側に、川や命がつながっていることを知ってから、世界の見え方が少し変わった気がする。あの日、晴れが続くことを喜んでいた自分はもういない。今は、ほんの少しだけ、空を見上げて雨を待つ気持ちがある。